

今山八幡宮所蔵本

「建礼門院右京大夫集」の諸注集成（Ⅱ）

田中司郎

はじめに

「建礼門院右京大夫集」の諸注集成（Ⅰ）で三五九首中の二九首の諸注集成を試みた。今回も平成元年の翻刻作業と平成十二年から十六年までの「書き入れ」検討の過程で研究した資料を使用して題詠歌群（一四〇五三）中の歌番号三〇から五三までの諸注集成を行った。

なお本書の本文は、宮崎県延岡市今山八幡宮の宝物として保存されていた今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』を底本とし、群書類従所収本、細川家旧蔵九州大学図書館所蔵本、宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、静嘉堂所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、吉水神社所蔵本（下巻闕）、内閣文庫所蔵本（下巻闕）、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、昭和美術館本等を参照した。

- 1 本文は「宮崎女子短期大学紀要 第十六号 翻刻」を使用した。
- 2 諸注の引用は重点的にあげ、同説は一括して示した。引用に当たっては、著者名の敬称を敬称させていただいた。異説のあるものは、そのまま示した。ときに語法、解釈、用例、鑑賞等にもふれ、簡要を期して記した。
- 3 文法は、主要な問題にとどめた。
- 4 口語訳は口語訳探求に資するために、異訳を補入した。ここに原著者に対し、非礼を深くおわびするとともに、ひとえにご許

容を乞う次第である。

- 5 原文の詞書は和歌より二字分下げて書かれ、和歌は上の句と下の句とを二行の分ち書きにするが紙数の都合で詰めて掲載した。
- 6 本文中の「書き入れ」は、「宮崎女子短期大学紀要」第二七号・二八号・二九号・三〇号に掲載したので大方、本諸注集成では割愛した。

諸注集成

いなりの社の歌合

社頭朝鶯

- 三〇 まろねしてかへるあしたのしめの中に心をそむるうくひすのころ

諸注

いなりの社の歌合せ―萩谷朴氏の「平安朝歌合大成」に「平安朝社歌合が、洛南伏見の稲荷神社における歌合せであろうことは難くないが、何時これが催されたものであるかということになると、全く確証はない。その歌題に鶯のあることと、集中の和歌の排列よりして承安四年（一一七四）春頃のことかと思われるが、憶断は許され

ない」とある。わたくしは承安五年（一一七五）か安元二年（一一七六）ではないかと思うが、もちろん確証があるわけではない。なお、「稻荷社の歌合」の出詠歌は「まろねして」の一首だけである。『夫木和歌抄』に下の「よをのこす」「あせにける」「すぎてゆく」「みし人は」の四首に「稻荷社歌合歌」という詞をつけて採録しているが、編者の誤認と思われる（本位田）。稻荷神社で歌合のあった時の歌。この歌合は、現在伝わらない。稻荷の社は伏見稻荷大社か（糸賀）。現在伝わらない。『平安朝歌合大成』は、本集により、「社頭朝鶯」の一首のみをこの散佚歌合での詠と見、承安四年（一一七四）から安元二年（一一七六）までの春の催しかと想定する。「稻荷の社」は山城國、現在の京都市伏見区にある伏見稻荷大社。祭神は倉稻魂大神（うかのみたまのおおかみ）・佐田彦（さだひこ）大神・大宮能売（おおみやのひめ）大神（久保田）。伏見稻荷神社における歌合であろう。この詞書は三二までにかかると考えておく。萩谷朴『平安朝歌合大成』八・四〇三参照（谷）。歌合―歌人を左右に分け、詠んだ歌を合わせ、判者に批評をさせて、勝負を決すること（村井）。いなるの社―稻荷神社。京都市伏見区深草町にあるのが名高い。ここもそこをさすのであろう（村井）。社頭朝鶯―「社頭、朝の鶯」（村井）。神社のあたりの朝の鶯、という題意（久保田）（谷）。社頭―社のほとり（本位田）。神社のほとり（村井）。しめの中―「しめ」は場所を限るためのしるし。しめの中は縄のひきわたされたうち、すなわち社の境内をいう（本位田）。心をそむる―「そ」の右横にミセケチなしで「と」を書き入れている。今山本、九州大学図書館所蔵本は「そむる」。吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本、寛永刊本は「とむる」。この考察が「宮崎女子短期大学紀要」第二十七号 二十五ページに記してある。心をとむる―

正元本「心をそむる」（本位田）。

口語訳 稻荷神社で歌合のあった時の歌。神社のほとりの朝の鶯
三〇 お社に参籠した翌朝 帰る道すがら境内で鶯の声がした 心に深く染み透ったことよ（糸賀きみ江著 新潮日本古典集成による）。

松間夕花

三一 いろひさすみねのさくらやさきぬらんまつのたえまにたえぬ
しら雪

諸注

松間夕花―「松の間の夕べの花」（村井）。松の間から見える夕方の桜花、という題意（糸賀）。三〇の稻荷社歌合の続き。「朝鶯」に対して、ここでは「夕花」（谷）。たえぬしら雲―「たえま」と「たえぬ」とが対照して用いられている。なお、やまの桜が白雲に見まぢがえられるという発想は、「古今集」春上、貫之の、桜花咲きけらしなあしひきの山のかひより見ゆるしら雲、などに拠ったものである。なお、山々には常に雲がかかっているというのが、「古今集」以来の通念であった（本位田）（谷）。遠山の桜を「しら雲」に見まぢがえる類例は、「山の峽たなびきたる白雲は遠き桜の見ゆるなりけり」（『貫之集』一）など、『古今集』以来多い。この流れの中でさらに「たえまにたえぬ」という、作者の特色である繰り返し、畳みかけの表現を用い、題意にかなう一首にしたてている（糸賀）。「しら雲」は桜の比喩（久保田）。「しら雲」は、桜を白雲と見たもの（村井）（谷）。まつのたえま―「松のたえま」は、松のたえた間（村井）。

口語訳 松の間の夕方の桜花

三二 夕日がさす峯の桜が咲いたのだろうか、緑の松の間に入日が白く輝いて、いつまでも消えないあの白雲は（久保田淳著「建礼門院右京大夫集」・糸賀きみ江著「新潮日本古典集成」による）。

日中の恋

三二 契おきしほとはちかくやなりぬらんしつれにけりなあさかほの花

諸注

日中の恋―昼ひなかの恋、という題意（糸賀）。昼間に逢う恋の意（村井）。昼間の恋愛。「『契日中恋』といへる心をよめる／涙にや朽ち果てなまし唐衣袖のひるまとたのめざりせば」（千載・恋三・中原清重）という類題の歌がある。作者と同時代人なので、あるいは三二の歌と同じ機会の詠か。「ひるをちぎる恋」（覚綱集）などがある。三二も歌の内容からすると、「契日中恋」であるが、同じ機会かどうかは不明（久保田）（谷）。三〇「朝」、三二「夕」、三二「日中」の三首連作と考えたい（谷）。契おきし―「お」の右横の書き入れ「を」の考察は、「宮崎女子短期大学紀要」第二七号の二六ページに掲載した。契おきしほと―約束しておいた時間（久保田）（村井）。恋人が来ると約束していた時刻（谷）。しつれにけりな―今山八幡宮所蔵本のみ「しつれにけりな」である。諸本「しほれにけりな」である。今山本は、誤写の可能性が高い。しほりにけりな―しおれてしまったことだ。「な」は感動を表す終助詞（久保田）（村井）。朝顔の花は昼になるとしおれるので、約束の時間が近づいたことがわかるのである（谷）。あさかほの花―「朝顔」の「顔」の連想で擬人化して一首を構成している。朝顔は「万葉集」では「き

きょう」をさす語であったようであるが、平安朝には「むくげ」をさすようになっていた。ここも「むくげ」と考えてさしつかえないと思う。白居易の詩に「權花一日自成榮」とある（本位田）。現代の朝顔の花と同じと思われる。中国から薬草として輸入され、種子は牽牛子（けにごし）（けんごし）と呼ばれた。この時代、恋人を待つのは女である。男の訪れを待つ焦燥感を紛らわそうと庭に目をやると、朝顔の咲いているのが見える。たびたび見るうちに早くもしおれてきた。女の気持ち同様、消沈してくるのである（久保田）。

口語訳 日中の恋

三二 約束しておいた時間はいよいよ間近くなっているのか。それに待つ人はまだ来ないと見えて、朝の間はあんなに元気があった朝顔の花がすっかり萎れてしまっておりまして（本位田重美著「建礼門院右京大夫集全釈」による）。

夜ふかきはるさめ

三三 ふくるよのねさめさひしき袖のうへをおとにもぬらす春雨の雨

諸注

夜ふかきはるさめ―夜ふけの春雨（谷）。夜ふけの春雨、という題意（糸賀）。ふくるよ―ふけた夜（村井）。ねさめ―独り寝を暗示する。『久安百首』に「寢覚めする床にしぐれはもりこねど袖のぬれにけるかな」（花園左大臣家小大進）という類歌がある（久保田）。おとにもぬらす―「音にも」は、寢覚めを寂しく思い、ぬらす袖の上を、さらに春雨の音にもぬらす意。「も」は、添加の意を表す係助詞（村井）。雨に直接打たれればもちろん袖がぬれるが、そうではなくその音を聞くだけでも何となくさびしくて袖がぬれる（本位田）。

音によって濡らす。春雨の音を聞いて涙で袖を濡らすのである(谷)。「お」の書き入れについての考察は「宮崎女子短期大学紀要」第二七号の二六ページに掲載した。

口語訳 深夜の春雨

三三 夜ふけに寝覚めて 寂しさに袖をぬらせば 外にはかすかに音がして さらに涙をさそう春の雨よ(糸賀きみ江著 「新潮日本古典集成」による)。

とをきさはのはるこま

三四 はるかなる野さはにあるゝはなれこまかへさやみちのほともしるらん

諸注

とをきさはのはるこま―遠くの沢にいる春の馬、という題意。「春駒」は、春の野に放牧する馬(久松)(糸賀)。「春駒」は、春の野に放し飼いにした馬。春の歌題(久保田)。「春駒」は春の野にいる馬(村井)。「春駒」は、春季山野に放牧する馬。蘆の芽、じゅんさい等を好んで食するので、沢、沼等と取り合わせて詠んだ歌が多い。「後拾遺集」春上、源兼長の歌に、立ちはなれ沢辺にある春駒はおのが影をば友と見るらむ、というのがある(本位田)。遠い沢にいる馬(谷)。あるゝ―荒々しく走る(谷)。はなれこま―放牧した馬(谷)。かへさ―帰り道。「遠き花を尋ぬといふ心をよめる 山桜心のままに尋ねきてかへさぞ道のほどは知らるる」(後拾遺・春上・小弁)(久松)(谷)。

口語訳 遠くの沢にいる春の馬

三四 遥かな野沢であばれている若駒は、行くときは夢中で駆けていっただろうが、帰りには随分遠くまで来たものとその道の

りを知るだろう(久松潜一校注 建礼門院右京大夫集による)。

くらきそらの帰り

三五 はなをこそおもひもすてめありあけの月をもまたてかへるか
りかね

諸注

くらきそらの帰り―暗い夜空を帰ってゆく雁、という題意(糸賀)(谷)。くらきそら―闇夜(村井)。はなをこそおもひもすてめ―初句・二句は、「春がすみ立つを見すててゆく雁は花なき里に住みやならへる」(伊勢、『古今集』春上)に拠る。雁は日本で冬を越し、春に北へ戻ってゆく(本位田)(糸賀)(谷)(久保田)。はなをこそおもひもすてめ―花は思い捨てて帰るのもいたしかたないが(村井)。ありあけの月―月の出が遅く、夜明け頃に空にかかる月。ここでは雁の帰るの間に合わないほど出るのが遅い月(糸賀)。陰暦二十日ごろには、月は夜おそく出るから、そうなるのである(村井)。ありあけの月をもまたて―趣ある有明の月を見ないで(谷)。かりかね―「雁が音」で雁が鳴く声、転じて雁。『新後拾遺集』春上に「暗夜の帰雁といふ事を」として入集(本位田)(糸賀)(谷)(村井)。

口語訳 暗い夜空を帰る雁

三五 桜の花をあきらめ 帰るとしても 有明の月の出も待たずに 暗い空を飛んで行く心ない雁よ(糸賀きみ江著「新潮日本古典集成」による)。

あかつきのよふことり

三六 夜をのこすねさめにたれをよふことり人もこたへぬしのよめ
の空

諸注

よふことりー鳴き声が人を呼ぶように聞こえる鳥。今の郭公という。春・晩春の景物として歌に詠まれる。『夫木和歌抄』春五に「稻荷社歌合、暁喚子鳥」として入集（糸賀）（本位田）。実体については諸説あり、はっきりしない。「をちこちのたつきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな」（古今・春上・読人不知）の「よぶことり」は、古今三鳥の秘説とされ、古今伝授において重んじられた。歌題としては、『堀河百首』の春二十題の一つになったように、もっぱら春に鳴く鳥として詠まれた。人を「呼ぶ」の意を懸けて用いられることが多い（谷）。夜をのこすー夜明け前の。「暁鹿 よを残すねざめに聞くぞあはれなる夢野の鹿もかくや鳴くらん」（山家集・秋）参照（谷）。まだ夜の明けないこと（本位田）（糸賀）（村井）。よふことりー「たれを」呼ぶ」と「呼び鳥」との掛詞（糸賀）（谷）。「山ざとにたれをまたこはよぶことりひとりのみこそ住まむとおもふふに」（『山家集』上・春）（糸賀）。たれをよふー「誰を呼ぶ」から「喚子鳥」へと続ける（久保田）。しのゝめの空ー「しのゝめ」は明け方（村井）。あけがたの空（本位田）（谷）。

口語訳 明け方の呼小鳥

三六 よぶことりはまだ明けやらぬ寝覚めに誰を呼んで鳴くのだらうか。人も答えないしのめどきの空で（久保田淳著「建礼門院右京大夫集」による）。

山田のなはしろ

三七 山里はかとおたのおたのなはしろにやかてかけひのみつまかせ

つゝ

諸注

山里はー「山里のそともの小田の苗代に岩間の水をせかぬ日ぞなき」

（金葉・春 藤原隆資）、「山蛙早苗／早苗とる山田のかけひもりにけりひくしめ繩に露ぞこぼるる」（大納言経信集）などを念頭に置くか（久保田）。門田ー門を出たところにある田（本位田）。門の近くの田（村井）。門前にある田（久松）。おたのー「小田」の「小」は接頭語（村井）。『下官集』に「を山田」、『仮名文字遣』に「をやまた 小山田」、歴史的かな遣いに「をやまだ」があるが、今山八幡宮所蔵本の「おた」は見あたらない。「宮崎女子短期大学紀要 第二七号の二六ページに考察がある。なはしろー稲の苗を育てるところ（糸賀）（谷）。やがてーそのまま。副詞（村井）（本位田）。かけひー水を導くため、地上にかけ渡した樋。山里は水の便が悪く、飲み水を引く筈の水で田を作っているということのおもしろさに着目した作（糸賀）。地上に出ていて、水を通す樋（村井）。懸樋の意、埋み樋に対するもの。地上に懸け渡して水を通わす樋（本位田）。まかせつつー「まかす」は、水を引く意（本位田）。水を引き入れる意（谷）。「みつまかせつつ」は水を引くと任せとをかけた語。「つゝ」は、継続を表す接続助詞（村井）。

口語訳 山の中の苗代田

三七 山里では門近くにある小さな田の苗代に、住まいのための懸樋の水をそのまま引き入れているよ（久保田淳著「建礼門院右京大夫集」による）。

ふるきいけのかきつはた

三八 あせにけるすかたのいけのかきつはたいくむかしをかへたて

きぬらん

諸注

ふるきいけのかきつはた―この歌も「夫木和歌抄」に、「稻荷社歌合 古池社若」として出ているが、「夫木抄」の編者の誤認であろう（本位田）（糸賀）。あせにける―色あせてしまった（谷）。「あせ」は下二段動詞「あす」（水が減って涸れる意）の連用形（久保田）。「あす」は浅くなる意の下二段動詞（糸賀）。「あせにける」は、水のあせてしまった（村井）。すかたのいけの―「相如集」に、言ひ出でば空もやはぢむ大和なる姿の池の影も違はぬ、と見え、また「千載集」恋四、待賢門院安芸の歌に、恋をのみすがたの池に水草ゐてすまみやみなむ名こそ惜しけれ、とあつて、「八代集抄」にはこれを「菅田池、大和添上郡也」と註している（本位田）。「すがたの池」は、奈良県大和郡山市筒井町にあるかきつばたの名所（村井）。「姿の池」は、大和国添上郡の歌枕。現、奈良県天理市に菅田の地名が残る。「すがたの池にて／ゆく人のすがたの池の影見れば浅きぞ底のしるしなりける」（相模集）（久保田）。「すがたの池」は、奈良県大和郡山市筒井町にある池で、杜若の名所、歌枕。池の名に「姿」をかける（糸賀）。姿の池。大和國の歌枕。「うちむれて姿の池に影見れば老の波こそ近づきにけれ」（行尊大僧正集）など、老のイメージをとまなう。池の名に「姿」の意を掛け、色あせてしまった姿の杜若と続く（谷）。かきつはた―「かきつばた」から「垣」を連想して「隔て」という。「にほ鳥のかづく池辺のかきつばたこれこそ夏の隔てなりけれ」（堀河百首・杜若 藤原仲実）、「かきつばたおなじ沢辺に生ひながら何を隔つる心なるらん」（堀河百首・杜若 河内）などと同想の作（久保田）。いくむかし―どれだけ古い昔（村井）。

口語訳 古い池のかきつばた

三八 色あせてしまったすがたの池に咲いているかきつばたは、一

体どれくらい時代を経てきているのか（久松潜一校注 「建礼門院右京大夫集」による）。

名所のすみれ

三九 おほつかなゝらひのおかののみしてひとりすみれの花そつゆけき

諸注

おほつかな―はつきりしない。わけがわからない（本位田）。「おほつかな」は、意味がはつきりしない（村井）。形容詞「おほつかなし」の語幹。はつきりしないなあ（久保田）。どうしてだろう（谷）。ならひのおか―京都市右京区花園にある岡（久松）。「ならひの岡」は山城国仁和寺の辺（本位田）。京都市仁和寺の南にある双ヶ岡（村井）（糸賀）。山城国葛野郡の歌枕。現、京都市右京区御室。一ノ丘から三ノ丘まで連なる。北麓に仁和寺がある。「思ふどちならひの岡のつぼすみれうらやましくもにほふ花かな」（堀河百首・春・菫菜 河内）などと同想。昭本「ならひのをかは」（久保田）（谷）。「お」に二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。『下官集』に「をかのへ」、『仮名文字遣』に「をか 丘」、『和字正濫抄』も「をか」で今山本の拠りどころは見当たらない。「宮崎女子短期大学紀要」第二十七号 二六ページに考察がある。すみれの花―「すみれ」は、ひとり住みの「住み」に言いかけてある。「ならぶ」と「ひとり」の対比など詞のあやの歌（糸賀）。なのみして―名だけ（村井）。ひとりすみれの花―「我が宿にすみれの花の多ければ来宿る人やあると待つかな」（後撰・春下・読人不知）同様、「すみれ」に「住み」を掛けている。「ひとり」は、上の「ならび」と対をなす。「ひとりすみれの花」は、右京大夫以前に「人々に百首の歌め

されけるついでに、葦菜をよませ給うける 荒れはててさびしき宿の庭なればひとりすみれの花ぞ咲きける」(新続古今・雑上・崇徳院)の用例がある。共棲みする相手がない寂しい境遇の女性の比喩か(谷)。花のすみれと住むとをかけた詞(久松)(村井)。

口語訳 名所のすみれ

三九 意味がはっきりしないことだ。双の岡に来てみると、双が岡とは名ばかりで、ならんで咲いているかと思つたら、すみれの花がひとつもと、露つぽく咲いているだけだ(村井順著「建礼門院右京大夫集評解」による)。

ところ／＼のやまふき

四〇 我やとのやえやまふきのゆふはへにゐてのわたりもみるこゝちして

諸注

我やとのやえやまふきの―「我やと」は我が家(村井)。第一、二句は「わが宿の八重山吹は一重だに散り残らん春の形見に」(拾遺・春 読人しらず)を念頭に置くか(久保田)。「やえ」の「え」の右横に三点のミセケチを施して「へ」の書き入れがある。『下官集』『仮名文字遣』に「やへさくら」がある。定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと考える。「宮崎女子短期大学紀要」第二十七号の二十七ページに考察がある。ゆふはへに―夕陽がさして、いつそう美しく見えること。名詞(村井)。夕日の光を受けた様子(本位田)。ゐてのわたりみるこゝちして―井手のわたりを見るような心地がして。「井手のわたり」は山城の国の歌枕。山吹の名所として知られる。かはづなく井手の山吹散りにけり花のさかりにあはましものを」(古今・春下。読人不知)。「道とほみ井手へもゆかじこ

のさともやへやはさかぬ山ぶきの花」(後拾遺・春下・藤原伊家)などと同様、身近なところに咲く山吹の花を井手に見立てる詠み方である(本位田)(谷)。井手のわたり―山城の国相楽郡井手の里。山吹の名所(本位田)。「井手」は、京都府綴喜郡にある山吹と蛙の名所(久松)(糸賀)(村井)。奈良街道と玉川が交差したあたり。玉川は六玉川の一つで山吹と蛙の名所。鴨長明の『無名抄』にも「井手款冬蛙事」の章段があり、鎌倉時代初期には井手の山吹は絶滅状態であったことが語られている(久保田)。わたり―「渡り」か(久松)。

口語訳 あちらこちらの山吹

四〇 わたしの家の八重咲きの山吹が夕映えするので、さながら井手の渡りを見るような心地がして(久田淳著「建礼門院右京大夫集」による)。

うみのみちのはるのくれ

四一 いかりおろすなみまにしつむ入ひこそくれゆく春のすかたなりけれ

諸注

うみのみちのはるのくれ―海路の春の夕暮、という題意(糸賀)。航海中の春の夕暮(村井)。うみのみち―航海。「海路」は堀河百首題の雑二十題の一つ(久保田)。はるのくれ―一日の日没と春という季節の暮れとの両意を兼ねている。上の句は絵画的、下の句が説明的ではあるが、晩春の日暮れの寂寥感が揺曳している(糸賀)(本位田)。いかりおろす―碇泊しようとして、いかりをおろすこと(村井)。昔の碇は重い石に綱をつけたもの。「いかりおろし」の句は、万葉集では「いかなる」「いかに」の序のように用いられてい

る。平安の和歌では「怒り」に掛けた例もある。「いかりおろす船の綱手はほそくとも命のかぎりたえじとぞ思ふ」（歌仙家集本 素性集）（久保田）。船を碇泊させ、碇をおろす（田に）。くれゆく春のすかた―一日も暮れ、季節も暮れる春。春の一日の暮れ方と、春という季節の暮れ方とを重ねた言い方（久保田）（谷）。「はるのすかた」は春の象徴（村井）。海の春の暮―『林葉集』（俊恵）『小侍従集』『親宗集』に同題と思しい歌（海路暮春）が見える。同じ機会に詠まれたものか（谷）。「海路暮春といふ事を 共にこそ船出はしつれ暮るる春などやとまりをよそに過ぎぬる」があるが、あるいは同じ機会の詠か（久保田）。

口語訳 航海中の春の夕ぐれ

四一 碇泊しようと、船がいかりをおろしているその波間に沈んでゆく落日の景こそ、春の象徴というべきである（村井順著「建礼門院右京大夫集評解」による）。

たきのへんのゝこりのゆき

四二 こほりこそ春をしりけれたきつせのあたりの雪はなをそのこれる

諸注

たきのへんのゝこりのゆき―滝のあたりの残雪、という題意（糸賀）。こほりこそ春をしりけれ―「立春解氷」の観念によつていう（久保田）。「東風解凍」（礼記・月礼）による。氷はいちはやく春を知り、解けるものとされる（谷）。「礼記」にいう「東風解凍」の心である。立春の日から東風が吹き、それが氷を解かすというのである。「古今集」春上、貫之の、袖ひちて結びし水の氷れるを春立つ今日の風やとくらむ、「金葉集」春、修理大夫頭季の、うちなびき春は来に

けり山河の岩間の氷今日やとくらむ、のように、古来氷は立春を知つて春が来れば解けると詠みならわされている（久松）（本位田）。たきつせ―滝のように流れの激しい川瀬（谷）（糸賀）（久保田）。滝。急流（村井）。雪はなをそのこれる―「雪はなほぞ残れる」と「残りの雪」の題をそのまま詠み入れているのは巧みとはいえない（久保田）。

口語訳 滝のあたりの残雪

四二 氷は春の来たことを知つて、解けて流れて、急流となつていくが、その滝のあたりの雪は、まだ残っていることだ（村井順著「建礼門院右京大夫集評解」による）。

さわらひ

四三 むらさきのちりはかりしておのつからところくにもゆるさわらひ

諸注

さわらひ―早春に萌え出た、まだ葉を広げていないわらび。その綿状の柔毛を「紫の塵」といった（久保田）。芽を出したばかりの蕨（谷）。「さ」は接頭語。蕨（村井）。むらさきのちり―早蕨の形容。「和漢朗詠集」（早春 小野篁）に、紫塵嫩蕨人拳手 碧玉寒蘆錐脱囊、とあり、また「堀河院太郎百首」頭季の歌に、紫の塵うちらはひ春の野にあさる蕨のものうげにして、というのがある（本位田）（糸賀）（久保田）（村井）。はかりして―「はかり」は程度を表す副助詞（村井）。おのつから―「お」に、二点のミセケチを施して、「を」を書き入れている。藤原定家仮名遣い実例を見ると、「をのつから」の表記が四例ある。定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと考える。「宮崎女子短期大学紀要」第二十七号の二十七ページ

に考察がある。自然と（谷）。もゆる―芽を出す（村井）。

口語訳 わらび

四三 紫色の塵ぐらいの姿で、春になると、自然とわらびが、あちらこちらに芽を出すことだ（村井順著「建礼門院右京大夫集 評解」による）。

ふねのとまりの花

四四 高砂の尾上のはるをなかむれは花こそふねのとまり成けれ

諸注

ふねのとまり―船着場。港。船の碇泊するところ（本位田）（村井）。ふねのとまりの花―船の碇泊場の花、という題意（糸賀）。船の碇泊場の花（谷）。高砂―兵庫県高砂市。加古川の河口にある要津。相生の松で名高いし、また桜の名所でもあった。「高砂の尾の上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ（後拾遺集・春・大江匡房）。播磨国の歌枕。「高砂の磯辺の桜咲きぬればいそぐ舟出も忘れにけり」（教長集・春）と類想の詠（本位田）（村井）（久保田）（糸賀）（谷）。尾上のはるをなかむれは花こそ―尾上の春といったのは下に「花こそ」とあるので重複を避けたのである（本位田）。吉水神社本に二句目「をのへのはなを」とあるが、四句目の「花こそ」と重複するので「春」がよい。花の美しさが船をとめてしまい、碇泊場になるという機知に富んだ発想（糸賀）。「尾上」は、峯（村井）。なかむれは―この下に「花に心惹かれて自然船もとめてしまふ」というような気持ちを補って解する（本位田）。花こそふねのとまり成けれ―花の咲いている所に船がとまっている様子をいったもの。「年ごとにもみぢば流す竜田河みなどや秋のとまりなるらむ」（古今・秋下・貫之）（谷）。

口語訳 港の花

四四 高砂の山の桜の咲き匂っている春の景色をながめると、心ひかれ、自然船を漕ぐ手もとまってしまふ。全く花こそ船の碇泊所になるのである（久松潜一校注「建礼門院右京大夫集」による）。

四五 ともふねも漕はなれゆくこゑすなりかすみふきとけよこの浦

風

諸注

ともふね―つれだつてゆく船（本位田）。昭本「ともふねの」。「友船」は仲間の船。西行や藤原清輔に作例のある語（久保田）。こゑすなりかすみふきとけよ―第三、四句は「帰る雁雲路にまどふ声すなり霞吹きとけこのめ春風」（後撰・春中 読人しらず）などを念頭に置か（久保田）。「こゑすなり」の「なり」は、推定の助動詞・終止形（本位田）（村井）。「かすみふきとけ」は、霞を吹き散らせ（村井）。よこの浦風―「余呉の浦」は、滋賀県伊香郡余呉町にある湖。なお、佐々木信綱氏は、「この歌には花の意が乏しい。歌の前に題が落ちたのであろう」（全書）といわれた（糸賀）（村井）。「余呉の浦」は、余呉湖（余呉の海）の湖岸。近江国の歌枕。現、滋賀県伊香保郡余呉町。「衣手に余呉の浦風冴え冴えて己高山に雪降りにけり」（金葉・冬 源頼綱）昭本「夜はのうら風」（久保田）。「余呉」は、余呉湖。琵琶湖の北。湖南に賤ヶ嶽の古戦場がある（村井）。近江国余呉湖畔の風。余呉は伊香保郡、琵琶湖の北にある（本位田）。よこの浦―近江の国。琵琶湖の北にある余呉湖。浦風と共に詠まれることが多い。前歌の題と合わない。題が脱落したか（谷）。

口語訳

四五 つれの船も漕ぎ離れて行く櫓の音がするようだ。そのようすが見たいから、余呉の浦風よ、霞を吹き散らせ（村井順著「建礼門院右京大夫集評解」による）。

花落衣

四六 さそひつる風は木すゑをすきぬなり花はたもとに散かゝりつゝ

諸注

花落衣—花が衣に散りかかる、という題意（糸賀）。「花、衣に落つ」（村井）。**さそひつる**—落花を誘ったの意（村井）。風が花を誘って散らせるというのである。「つる」は完了の意、風が吹きすぎて花の散りやんだ瞬間をとらえている（本位田）。「さそふ」は、「花さそふ比良の山風吹きにけりこぎゆく舟の跡みゆるまで」（宮内卿『新古今集』春下）のようにしばしば用いられた（糸賀）。**さそひつる風**—落花を誘う風（谷）。**すきぬなり**—「過ぎぬなり」の「なり」は音を聞いてその源を推定する助動詞（村井）。**花は**—「折梅花挿頭 二月之雪落衣」（和漢朗詠集上・子曰 尊敬）の詩句を念頭に置くか（久保田）。

口語訳 花が着物に落ちる

四六 落花を誘った風は、今、梢を通り過ぎていったようだ。花は自分の袂に散りかかり散りかかりする（村井順著「建礼門院右京大夫集評解」による）

老人を恋

四七 つくもかみ恋ぬ人にもいにしへはおもかけにさへみえける物を

諸注

つくもかみ—老女の白髪（村井）（本位田）。この歌は「伊勢物語」、

「つくもがみ」の段の説話によったもの。今その内容を簡単に述べると、昔色好みの老女があった。何とか情ある男に逢いたいと思っていたが、その気持ちを察したその子が、ははの思いを叶えさせてやりたいと、折から狩に出ていた業平にこれを打明けた。業平は哀れがってその夜は行って宿ったが、その後はもちろん通ってゆかない。思い余った老女が男の家に行って様子を窺っているのを知って、男は、百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらし面影に見ゆ、といって、外出の仕度をして見せた。女は急いでわが家に帰って男の来るのを待っている。男は、女がしたように外から窺うのであるが、女のしぐさの哀れさに打たれてその夜も宿った、というのである（本位田）。「つくもがみ」「おもかげ」は、ももとせに一年たらぬつくもがみわれをこふらし面影にみゆ」（『伊勢物語』六十三段）による（糸賀）（久保田）（村井）（谷）。「つくもがみ」は、老人の白髪。「つくも」は水草の名で、老人の白髪がつくもに似るため、また、つくもも（次百）の約で百に一画足りない白の意、という説もある。「……ものを」は、逆接的な気持ちがあふくまれる感動の助詞（糸賀）。**恋ぬ人**—『伊勢物語』同段での「在五中将」をさす（久保田）。「こひぬ」の「こひ」は上二段の未然形、「ぬ」は打消の助動詞・連体形。「恋わない」の意。「おもかげ」はぼんやり目さきに見える姿（村井）。**いにしへ**—『伊勢物語』の昔は（谷）。**おもかけにさへ**—相手が自分を思っていると、その面影が目に見えると思われられているのである（本位田）。

口語訳 老女を恋う

四七 昔の物語では とりわけ恋うていない人にも 白髪の老女の姿さえ 髻髻として 見えたというのに なぜあの方の面影

が わたしの眼の前に見えないのか（糸賀きみ江著 新潮日本古典集成による）。

雨中草花

四八 すきてゆく人はつらしな花すゝきまねくまそてに雨はふりきて

諸注

雨中草花―「草花」は歌題としては秋草の花を意味する（久保田）。
「夫木和歌抄」に「稻荷社歌合 雨中草花」としてこの歌が出ている。しかし、これが誤りであることは（参考）の欄に述べる。（参考）この歌から「関をへだてたる恋」までの三首は、承安五年七月二日の高松女院妹子内親王歌合の出詠歌とする萩谷朴の説（『平安朝歌合大成』八）に従うべきである。書陵部本「有房集」に「高松宮の歌合に」として「雨中草花」「依所月明」「隔関恋」という歌題の歌が見え、同じく書陵部本「覚綱集」に「高松宮の歌合に雨中草花といふことを」「高松宮歌合に関を隔つる恋を」という詞書の歌がある。また前田家本「親宗集」に「三条姫宮の歌合に雨中草花」とも見える。「右京大夫集」には「高松宮歌合に」とは記されていないけれども、歌題の排列の順序まで「有房集」と同じなので、これらも同じ時の出詠歌と見てよいことになる。高松女院は鳥羽院の皇女で、御母は八幡の別当光清の女であった。歌合の翌年安元二年六月三十六歳で薨ぜられた。御母の光清女は「石清水祠官系図」に光清の女の中に「母同任清。美濃局祇候于鳥羽院。後伏見。源中納言師長卿室。イ本経号宮御前」とあるのがこれであろう。歌人待宵の小侍従の妹にあたる。六宮道恵法親王、七宮覚快法親王、二条院の後であった妹子内親王および雙林寺宮を生んでいる。右京大夫が

この歌合に参加した所縁は明らかでないが、右京大夫と交渉のあった歌人待宵小侍従が高松女院の叔母にあたるので、あるいは、小侍従の推薦によるものかとも想像される。なお、この歌合の行われたのは「玉葉」の承安五年七月二日の条に「晴。参女院御所、入夜密々有和歌等。」とあるので、この時のことと推定してほぼ間違いないと思う（本位田）。四八・四九・五〇は、「高松女院妹子親王家歌合」に見られるという指摘がある（萩谷朴『平安朝歌合大成』。「稻荷社歌合、雨中草花」として『夫木和歌抄』秋二に入集（糸賀）。『夫木抄』十一・薄に入る。詞書「稻荷社歌合、雨中草花」。『有房集』その他によれば承安五年（一一七五）七月二日（？）高松宮（妹子内親王）歌合での詠か（久保田）。四八〜五〇―「高松宮歌合」の詠と思われる。高松宮については、高松女院妹子内親王とも、双林寺宮とも言われている。参加歌人に源有房・覚綱・平親宗・平親盛がいる（谷）。すきてゆく―通り過ぎて行く（谷）。「すきてゆく」の「く」に二点のミセケチを施して右横に「く」を書き入れている。「く」の正確な読みを期したと考える。「宮崎女子短期大学紀要」第二十七号 二十七ページに考察がある。つらしな―つれないことだ。「な」は詠嘆の終助詞（村井）（糸賀）。無情だなあ（谷）。花すゝき―穂の出たすすき（村井）。まねく―薄の穂の靡くさまを人を招くと見立てたもの。「尾花が袖」と同じ（本位田）（村井）。まそて―「ま」は接頭語（本位田）（村井）。雨はふりきて―雨に濡れた薄を、涙に濡れた人の袖に見立てた（谷）。

口語訳 雨中の草花

四八 招いても足をとめないで過ぎてゆく人は薄情だなあ。招く花すすきの袖に涙のような雨は降ってきて（久保田淳著『建礼門院右京大夫集』による）。

月依所明

四九 名にたかきおはすてやまのかひなれや月のひかりのことにみ
ゆらん

諸注

月依所明―月の光も場所によって明るさがひとしおである(谷)
(本位田)。月光も場所によりとりわけ明るい、という題意(糸賀)。
「月、所によりて明かなり」。月は場所によって明るい(村井)。名
にたかきおはすてやま―これも高松宮歌合での詠か(久保田)。「姨
捨山」は、長野県善光寺平の南部にある山、観月の名所。「わが心
慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」(よみ人しらず、『古今集』
雑上)(久松)(糸賀)(本位田)(谷)。「姨捨山」は、信濃国の歌枕。
現、長野県北部にある冠着山。月の名所。「名に高き姨捨山もみし
かどもこよひばかりの月はなかりき」(詞花・雑上 藤原為実)(久
保田)。「おはすて」の「お」に二点のミセケチを施し、「を」を書
き入れている。定家仮名遣い系統の写本、「仮名文字遣」も「をは
すてやま」である。「宮崎女子短期大学紀要」第二十七号 二一八
ページに考察がある。かひなれや―「かひ」は山の「峽」と効果の
意の「甲斐」を掛けている(久松)(谷)。「山」の縁語「峽」に
「効(かひ)」を掛ける(久保田)。「かひなれや」は「峽であるため
か」「かひなればにや」の意。「や」は間投助詞。「かひ」は峽。山
と山との間。ここは掛詞で、おかげという意の「かひ」とかけてあ
る(本位田)(村井)。ことにみゆらん―「ことにみゆらん」は、格
別美しく見えるのであろう(村井)(谷)。

口語訳

四九 月は所によって特にあかるい
月に明るく見えるのであろうか(本位田重美著「建礼門院右京

大夫集全釈」による)。

せきをへたつる恋

五〇 こひわひてかくたまつさのもしのせきいつかこゆへき契なる
らん

諸注

せきをへたつる恋―へだてがあつて逢い難い恋、という題意(糸賀)。
関所を間においた恋(村井)。こひわひて―恋に悩んで(村井)。恋
心にたえかねて(谷)。これも高松宮歌合での詠か。同じ際の詠と
思われる覚綱の歌に「身のうさを心づくしにかきやりし文をば通せ
文字の関守(覚綱集)とある(久保田)。たまつさの―玉章。手紙
「たまづさの文字」から「文字の関」へと続ける。昭本「たまづ
は」(久保田)(村井)(本位田)(谷)。「たまづさ」は、「たまあづ
さ」の約。梓の杖は使者の持物だった。古く文字のない社会では、
使者が伝言などを口で伝えたことから、使者の持つ杖が手紙とか便
りの意となった(糸賀)。もしのせき―文字と、豊前の門司の関と
をかけた語(村井)。「文字」と「門司が関」(福岡県にあった関所)
がかかっている(糸賀)。豊前国の歌枕。現、北九州市門司区。大
宰府に往来する旅人を警護する関があった。「文字」の意を掛けて
歌うことが多い(久保田)。玉づさの文字と門司とを掛けた(本位
田)(谷)。こゆへき―逢うことのできる(谷)。「関」の縁語で「越
ゆ」という(久保田)。契―宿命(村井)。男女の縁(糸賀)。

口語訳

五〇 恋しさに堪えかねて 書く恋文も 隔てがあつて先方へ届か
ない いったい いつになったら 隔てがとれて 逢うこと
のできる縁なのか(糸賀きみ江著「建礼門院右京大夫集」新

潮日本古典集成による。

山家初雪

五一 春の花秋の月にもおとらぬはみやまの里の雪のあけほの

諸注

山家初雪―「山家の初雪」。他本に「山ざとのはじめの雪」とある(糸賀)(村井)。春の花―類想歌「春の花秋の月にも残りける心の月にも残りける心のはては雪の夕ぐれ」(秋篠月清集・十題百首)(久保田)。「春の花秋の」の語が愛用された時期を考えると、詠歌年次は『新古今集』編纂時期にまで下ることになる。家集成立にかかわる問題としてさらに検討の必要がある。佐藤恒雄「建礼門院右京大夫集の成立―新古今集からの影響歌を起点として」(『言語と文芸』八七、昭五十四年三月)(谷)。おとらぬは―「お」に二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。「おとる」は定家仮名遣い実例、『和字正濫鈔』にあり、「をとる」は、行阿の『仮名文字遣』に見られる。このことについては、「宮崎女子短期大学紀要」第二十七号の二十八ページに考察がある。みやま―「み」は接頭語(村井)。深山・山奥(糸賀)。雪のあけほの―新古今時代に流行した表現。「さびしきはいつもながめのものなれど雲間の峰の雪のあけほの」(秋篠月清集・冬)など(谷)。藤原頭輔に「かをらずは誰か知らまし梅の花白月山の雪のあけほの」(頭輔集)などの作例があるが、このころはまだ新鮮な印象を与えた句。慈円・藤原良経・藤原定家らが頻要している(久保田)。

口語訳 山家の初雪

五一 春の花や秋の月にもおとらないのは、山の中の村の、雪の夜

明けの景色である(村井順著「建礼門院右京大夫集評解」による)。

さいはらによするこひ

五二 みし人はかれくになるあつまやにしけりのみするわすれ草

哉

諸注

さいばらによするこひ―催馬楽に託した恋(村井)。催馬楽の歌詞に寄せた恋。ここでは催馬楽「東屋」をさす。歌林苑十首歌会にも見える題(谷)。この時代にしばしば試みられた歌題。右京大夫の兄弟の伊経もこの題を「分け来つる小笹が露のしげければ近江路にさへ濡るる袖かな」(千載・恋三)と詠んでいる(久保田)。この歌、「夫木和歌抄」に「稻荷社歌合 寄催馬楽恋」として出ているが、恐らく編者の誤認であろう(本位田)。みし人―愛し合った人(谷)。逢った人(村井)。「見し」は男女の契りの意(糸賀)。「夫木抄」三十六・恋に入る。詞書「稻荷社歌合、寄催馬楽恋」、第三、四句「東路にしげりのみゆく」。「東屋の 真屋のあまりの その雨そそき われ立ち濡れぬ 殿戸開かせ かすがひも とざしもあらばこそ その殿戸 われささめ 押し開いて来ませ われや人妻(催馬楽・東屋)により、「東屋の小萱の軒の忍ぶ草しのびもあへず茂る恋路に」(久安百首 藤原親隆)などを念頭に置くか(久保田)。かれくになる―「離れ離れ」と「枯れ枯れ」との掛詞(谷)。おとずれが絶えがちになる(村井)。訪れが間遠になるの意の「離れ離れ」に「草」の縁語の「枯れ枯れ」を掛ける(糸賀)(久保田)。うとうとしくなる(本位田)。あつまやに―「東屋のまやのあまりのあまそそき我立ち濡れぬ殿戸開かせ」催馬楽「東屋」(谷)。四方

葺き下ろしの簡素な建物。亭（糸賀）。催馬楽の歌曲名。（詞章は「みし人」の項に同じ。）「かれがれになるあづまや」と続けたのは、男が「われや人妻」といった女にうとうとしくなるという気持なのであろう。「あづまやに」「吾夫（あづま）」をかけてある。忘れられた女の気持をよんでいる。「あづまや」は託してよんだだけで、歌全体の意味には関係がない（本位田）。しけりのみする。「茂り」は「草」の縁語（久保田）。**わすれ草**—萱草ともいう。百合科の多年草本。七月ごろ橙黄色の花を開く。ここでは恋人に忘れられることを暗示する（久保田）（村井）。恋忘れ草とされる。「かれく」「しけり」の縁語。（谷）。

口語訳 催馬楽に託した恋

五二 かつて逢った人は、今は疎遠になって、東屋に忘れ草がどんどん茂るように忘れられていくよ（久松潜一校注 「建礼門院右京大夫集」による）。

山家花をまつ

五三 山里の花をそけなるこすゑよりまたぬあらしのおとそ物うき諸注

山家花をまつ—他本に「山ざとのはなをまつ」とある（糸賀）。吉水神社本、内閣文庫本は「山里の花を待つ」（本位田）（谷）。山里の家が花を待つ、意（村井）。**山里の**—「吉野山桜が枝に雪ちりて花おそげなる年にもあるかな」（西行上人集 春。新古今・春上西行）を念頭に置くか（糸賀）（久保田）（谷）。**花をそげなる**—開花が遅そうな（村井）（谷）。**こすゑより**—「より」は動作の行われる場所を示す。「を通つて」などという意に近い。「土佐日記」のみなそこの月の上よりこぐ舟の棹にさはるは桂なるべし などはそ

の例である（本位田）。またぬあらし—待っていない嵐（谷）。「あらし」は強い山風。花を散らすので「待たぬ」という（久保田）。「おとそ」の「お」の右横に「を」の書き入れがある。「下官集」に「風のをと」があり、定家仮名遣い実例も多数見られるので書き入れは定家仮名遣いに基づくと考ええる。「宮崎女子短期大学紀要」第二十七号の二十八ページに考察がある。物うき—いやだ。「物」は接頭語（村井）。【評】これら多くの題詠は、作歌の時代が、平家の栄華時代に詠まれたものだから、ここへ挿入したものであろうか、よくわからない。とにかく、これらのうまくもない題詠を、作者がここへ挿入したため、かなりこの家集の平家物語性が破壊されていることは、きわめて残念なことである（村井順著「建礼門院右京大夫集評解」）。【参考】井狩正司氏は「建礼門院右京大夫集構想理論のための覚書（二）」（「語文」第十七輯）の中で、ここに集められた四〇首の題詠歌の持つ意味について論ぜられている。その大要を摘記すると、次のとおりである。（一）四〇首の題詠歌群がそれに先行する話群を締めくくる意図をもって据えられている。（二）冒頭から一三首めまで、つまり題詠歌群に先行する話群はいずれも承安四年から治承二・三年頃までの追想ばかりで、資盛との恋愛を体験する前の、いわば彼女の幸福な宮廷生活時代を内容としている。その点、題詠歌以降のものとは内容・形式を異にし、ここに明瞭な一線が劃されていると見ることができ。（三）日本大学図書館所蔵本は、題詠歌群までの和歌が二行に書かれ、八五四V以下ではそれが一行書きになっている。これは本集の草稿が形成せられてゆく段階における、作者の話群意識の投影と考えられ、かつ執筆の時期などを推定させる要素が含まれている。以上の論拠から、四〇首の題詠歌群以前のものは、それ以後、つまり八五四V以後のものよりも

かなり早い時期の執筆と見做す必要があると推定して居られるのである。そこで、これに対するわたくしの意見をここに略記しておきたい。(一)(二)で井狩氏の言われるとおり、四〇首の題詠歌群を境として前後異質なものがあるといふ点には、わたくしも異論はない。しかし、わたくしは、後の七夕の歌の終りまでは文治・三四年の頃に一挙に書き綴られたと考えているので—この点については後に追々明かにしてゆくつもりである。—井狩氏の言われるように「かなり早い時期」とは考えない。むしろ、これから資盛・隆信などとの恋愛生活を述べてゆくに先立って、彼女の生涯を支配した愛人との出会いの場を描くことを意図したものであって、いわば次の跳躍を大きくするための屈身のようなものであったと考えるのである。右京大夫が彼女の悲恋を綴ることに目的があったことは言うまでもないが、それならばなぜその目的と直接関係のない、題詠歌までの前半部が据えられているのかと言えば、巻頭部の「参考」に指摘しておいたように、この集はあくまでも家集として撰ばれたもので、日記ではないからである。家集である以上、題詠歌も当然載せなければならぬ。そうして、七夕の歌までを第一次成立と見る立場から言えば、この四〇首の題詠歌の据える場所はやはりここしかないのである。なお、ここに境界を劃することによって、前半の喜びと後半の苦しみとが対照的となり、後半の苦しみの叙述をいっそう際立たせる効果があると思われるが、それは結果としてそう見られるのであって、最初からの彼女の意図ではなかったらうと思われ。井狩氏の挙げられる(二)の根拠は、必ずしも成立の時期や過程を示す決定的な根拠になり得ると思われない。冊子の紙数の都合もあつたかもしれないし、筆写者が交替し、後の筆者の癖が偶然出ることもあり得るのである。(本位田)

口語訳 山里の家が花を待つ

五三 寒いので、山里の花はなかなか咲きそうもないのに、その花の木の梢をとおってくる待ちもしない嵐の音がうとましい
(久松潜一校注 『建礼門院右京大夫集』による)。

おわりに

今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』を国文科共同研究の対象にふさわしいものとして翻刻作業をしたのは平成元年六月から七月にかけてであった。この翻刻作業の過程で三百五十余りの書き入れ、夥しいミセケチ、検討を要する校合等が出てきた。これらの考察を『宮崎女子短期大学紀要』第二十七号・二十八号・二十九号・三〇号に「今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ(一)(二)(三)(四)として発表した。この考察の過程で、多くの研究資料にご教示いただいて仮名遣い資料などの理解を深めることができた。感謝の念で一杯である。今回は、前回に引き続き、「書き入れ」、夥しいミセケチ、校合等を考察する過程でご教示いただいた諸注の集約を試みた。前回は、二九番までであった。今回は、三〇番から五三番までで、主に題詠歌群の諸注の集約を行った。この作業をしていると、歌の理解が広がるばかりでなく、深くなることに気付いた。また諸注集成以前に予想していなかった「建礼門院右京大夫集」成立にかかわる題詠歌群の検討課題を見出したことは大きな収穫であった。

使用文献

○ 本位田重美著『評注 建礼門院右京大夫集全釈』(武蔵野書院一九七四)

- 久松潜一校注『日本古典文学大系八〇 平安鎌倉私家集 建礼門院右京大夫集』(岩波書店 一九六四)
- 久高高文著『建礼門院右京大夫集』(桜楓社 一九六八)
- 井狩正司著『建礼門院右京大夫集 校本及び総索引』(笠間書院 一九六九)
- 村井順著『建礼門院右京大夫集評解』(有精堂 一九七二)
- 草部了円著『世尊寺伊行女 右京大夫家集』(笠間書院 一九七八)
- 糸賀きみ江著『新潮日本古典集成 第二八回 建礼門院右京大夫集』(新潮社 一九七九)
- 久曾神昇著『昭和美術館蔵 伝津守国夏 建礼門院右京大夫集と研究』(ひたく書房 一九八二)
- 今井卓監修『建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』(勉誠社 一九九〇)
- 大原富枝著『朝日文芸文庫 建礼門院右京大夫』(朝日新聞社 一九九六)
- 久保田淳 校注・訳著『新編日本古典文学全集四七 建礼門院右京大夫集・とはずがたり』(小学館 一九九九)
- 谷知子校注『建礼門院右京大夫集』(『和歌文学大系二三 式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』明治書院 二〇〇一)
- 平林文雄編『九州大学附属図書館細川文庫蔵 建礼門院右京大夫集』(和泉書院 一九八六)
- 共同研究 後藤多津子 田中司郎 塚本泰造 原田真理 今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』翻刻(宮崎女子短期大学紀要 第一六号抜刷 一九九〇)